

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4072500285
法人名	日本医療サービス株式会社
事業所名	グループホーム大川 (ユニット名 グループホーム3階)
所在地	福岡県大川市大字榎津160番地1
自己評価作成日	令和2年1月23日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人福岡県介護福祉士会
所在地	福岡市博多区博多駅東1-1-16第2高田ビル2階
訪問調査日	令和2年2月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

職員とご利用者が『共に過ごす』という視点を大切にしています。
 ホームという生活環境の中で、個々の生活リズムを大切にし、四季を感じながら生活出来るよう支援する事を念頭に、安心して暮らしていけるように家族や地域の方々、関係性を図りながら支援することを大切にしています。
 又、外出の機会を増やす事や夏祭りや敬老会といった地域を交えたイベントに力を入れ取り組んでいます。
 今後も、私たちの理念である『和』の想いに添ったホームづくりを実現できるよう、みんなで取り組んでいきたいと思います。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

母体法人が運営する6階建てビルの3階、4階部分に2ユニットのグループホームがある。他階には訪問看護・訪問介護・高齢者向け生活支援型住宅・事務所・厨房を併設している。病院を母体とする法人で、医療・福祉・教育と幅広い事業を全国展開しており、福祉・医療の最新の情報が入手しやすく、法人内で多職種連携も取り易い事業所でケアに活かされている。看護師による利用者状態観察・健康管理が毎日行われ、緊急時には、看護師・連携医療機関への連絡、相談体制が整えられ、利用者は安心して生活できている。どの居室も広さがあり、洗面台とトイレを設置しており、利用者のプライバシーへの配慮が行き届いている。3階は各居室がフローリングと畳の居室で、持参した家具等を思い思いに配置して、家庭的な雰囲気の中、畳の上でゆったり寛ぐこともできる。職員は、理念にある「和」を大切に利用者一人ひとりの安心と尊厳ある生活が継続できるよう支援に努めている。地域の各公民館の依頼で、職員が出向き介護教室を開催しており、地域に根差した事業所として、今後も期待されている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念に基づいたケアが出来るように、職員間でのコミュニケーションを大事にしている。又、申し送りや日報報告の際も、管理者とケアの方向性を確認し意見交換を行っている。	開設時に創られた運営理念「和」が今も継承されており、目につきやすい廊下に掲示している。職員は新人研修で「和」の持つ本来の意味について理解している。職員はミーティングで基本理念に沿ったケアが日頃実践できているかの振り返りを行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	木工祭や夏祭り等の地域の行事に参加したり、ホーム内で行事を行う際は、家族はもちろんの事区長さんや民生委員にお知らせを配り、出来る限り参加して頂ける関係性の構築に努めています。	昔から続く地域の祭事に利用者と参加したり、花火大会を近くのグラウンドで地域住民と交流しながら見学する機会がある。近所の園児やボランティアの訪問を受け、踊りや歌の披露の後、交流を楽しんでいる。各公民館からの依頼で職員が出向き、介護教室を開催している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	町の老人会や区長さんの要望受け、介護教室を実施している。 運営推進会議を通して、町内会長から介護教室の依頼も増えてきていて、地域の方々との交流も深まっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	概ね2ヶ月に1回の運営推進会議を開催し、近況報告や意見交換を行っている。又会議の際には、おやつ作りを実施し、入居者の方々との交流も図れるように企画している。	地域の老人会長・民生委員・区長・家族・市職員等の参加で開催している。毎回、行事報告やヒヤリハット事例を含めた近況報告を行い、参加者からアドバイスを受け、職員ミーティングで話し合い、行事計画の参考にしたり、サービス向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	ホーム内の介護事故に関して、速やかに報告書を作成・提出し情報共有している。又、市役所主催の研修会にも参加し、(介護保険課ともメールを活用し、情報のやり取りをしている。	市担当課とはメールで市主催研修案内を受けたり、事業所の入居情報を伝えたりして、連携を図っている。ケア内容が身体拘束に該当するかどうか、管理者が窓口へ出向き、相談している。市の巡回相談員の定期訪問があり、職員の言葉遣いについてアドバイスを受け、職員間で改善に向けて検討を行った。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービスにおける禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、高齢者虐待・身体拘束廃止の勉強会を実施し、その理解に努めている。 やむを得ない場合になった時の報告・連絡・相談についても徹底している。	職員は法人全体研修と内部研修で、身体拘束について学ぶ機会があり、内容を理解している。ベッドの転落予防ではサイドレールに頼らず抱き枕を使用し、夜間巡回を強化する取り組みに変更した。事業所出入口は、リモコン操作での開閉の為、ミーティングや適正化委員会で、利用者の希望に沿う外出支援について、今後も検討していく予定である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎年、高齢者虐待・身体拘束廃止の勉強会を実施し、その理解に努めている。 双方の身を守る意味でも、防犯カメラを設置し、その防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修での学びを活用し、理解を深めるようにしている。また、必要に応じて利用できるよう、関係機関と連携を整えている。	法人全体研修で職員は権利擁護制度について学び、概要を理解している。1階事務所にパンフレットを設置し、利用者・家族からの相談があれば、職員は、管理者へ繋ぎ、制度の内容について説明できる体制がある。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結時や改定があった際には、入居者及び家族に説明を行ったのち、理解をいただいた上で、同意書にサインを頂いている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見を述べやすいように意見箱を設置しているが、実際の投書は見られず。定期的に介護相談員の来訪があり、意見や要望を外部に表せられる機会を設けている。R元年10月より専属の介護支援専門員1名を配置し、サービスの質の向上に努めている。	法人事務所より家族向けに年1回サービス満足度調査を実施しており、サービス向上に反映している。家族より居室に内鍵設置の要望があり、本人以外の無断入室の原因と対応を職員間で話し合い、実践することで、無断入室が無くなった事例がある。意見等が出たときは職員間で検討と対応をして家族にも了承を得る体制をとっている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ホームミーティングでの意見交換や必要に応じての個別面談を実施している。	職員は、日頃から管理者に意見が言いやすく、ミーティングの中でも勤務シフト・業務分担・記録書式変更などの意見を出している。職員間でも話し合い、意見を取り入れた業務改善が行われ、働きやすい環境となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	グループ内の人材育成委員会による勉強会や、それに基づく自己評価により、人事考課を行っている。 就業環境の改善と向上に努めている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮し生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保障されるよう配慮している	男女問わず、幅広い年齢層の職員を採用しており、職員間の関係も良好である。	採用面接は法人代表が行い、性別や年齢で排除することはない。現在職員は19歳から60歳代まで幅広く、常勤採用職員が多い。職員はそれぞれの得意分野を活かして生き生きと働いている。希望休暇が取りやすく、昼休憩はスタッフ休憩室があり、きちんと身体を休めることが出来ている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	ケアの場面を通じ、利用者本位の視点のとらえ方を共に考えるようにしている。	法人全体研修に参加した職員が、資料を使い人権教育の伝達研修を実施している。利用者居室へ入る際、職員は、ノックをして了解を得よう徹底している。声掛けは利用者目線を合わせ、丁寧な言葉使いを心がけているが、気になる場合は、職員間で注意し合ったり、管理者が具体的に話をして、人権を損なうことのないように取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	人材育成委員会主導の勉強会の開催や、外部研修の支援(補助)を行っている。資格取得に向けた取り組みも強化している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	相互に見学訪問するなど、同業者と交流する機会を設け、質の向上に努めている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用に至るまでの話し合いや、要望や不安に思っていることを1つずつ確認しながら安心して利用できるよう努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前の見学の時の聞き取りや、利用に至るまでの話し合いの中で、事業所に求めることや困っていることを確認し、信頼していただけるように努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	主観的にならないように、職員の意見も聞きながら、多様な視点で、必要な支援につながるように努めている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	『共に過ごす』という視点を大切にしている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	来訪時の近況報告や情報交換の機会を大切にしている。生活は別にしているも、『共に過ごしている』という関係性を大切にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	これまでの人間関係や社会とのかかわりを把握し、その関係を継続する支援に努めている。	家族が馴染みの美容室やお店に連れて行ったり、外食に連れて行く事がある。お盆や正月には、自宅や親族宅に連れて行き、親しい人との交流が楽しめている。外出の際は、職員が利用者の着替えや身だしなみを整えるなどの支援を行っている。家族、知人の訪問があれば、職員が椅子を用意し、お茶を出して、居室でゆっくり談笑出来るよう配慮している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の生活歴・性格を把握したうえで、他者との交流を楽しめる環境を作ったり、共同生活が円滑に行えるよう努めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	これまでの関係性を重視し、いつでも相談できる体制であることを説明している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人との会話や行動の把握を通じて得た情報や家族との情報交換などから、思いを読み取り、本人本位に検討している。	入居する前に家族や利用者から思いや意向を聞き取り、また、利用者同士の会話の中や職員の日々のかかわりの中で思いをくみ取っている。入浴など個別に対応する時に、ゆっくりとした雰囲気の中で気持ちを聞き、聞き取った内容は記録に残し、職員間で共有している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居段階で得た情報に加え、日々の援助関係の中でもアセスメントを深め、記録をすることで情報共有に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	アセスメントの共有及び介護計画に基づくモニタリングを活用している。また、日々の記録にも注意しながら情報共有している。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	アセスメントの共有及び介護計画に基づくモニタリングを活用している。また、日々の記録にも注意しながら情報共有している。	本人、家族の意向、往診時に医師からの情報、看護師や職員からの意見を取り入れ、担当職員と介護支援専門員の共働で介護計画を作成している。職員は介護計画を回覧し、利用者のプランを把握している。毎月全職員で評価を行い、利用者の状況が変われば見直しを行い、現状に即した介護計画を作成している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別ファイルを作成し、日々の記録はそこに記載するようにしている。また、日誌にも特記事項を記載することで見直しに活かしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個別対応に努め、その時に必要な支援ができるよう、勤務体制の変更などを行っている。家族や来客者が宿泊できる設備もある。 (※規定の範囲内での看取り対応可能)		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域行事への参加、外出支援などを行っている。 (ボランティアや園児の来訪時折あり) 地域資源の情報収集と活用が課題。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時はそれまでのかかりつけ医で受診することも多いが、家族が受診に付き添うことが困難な場合は、訪問診療の説明を行っている。	事業所の協力医による往診が、月に2回あっている。在宅時からのかかりつけ医や他科受診は基本家族が通院介助をして、病院との連携は、情報提供票を渡し、診察後の結果を書面でもらっている。家族の通院介助ができない時には職員が対応している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護と医療連携を締結し、24時間体制で、緊急時等のアドバイスを得られるようにしている。 又、R元年9月より週3回(非常勤)の専属看護師を配置している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院が決まった日に医療機関のMSWIに情報を伝達している。また入院中も状況の報告をいただいている。常に報告・連絡・相談をすることで、信頼関係を構築している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人・家族の意向を確認し、状態をみながら事業所としてできることを説明し同意をいただくようにしている。	法人内で看取りの勉強会を実施し、マニュアルも準備している。重度化した場合は、家族に医師、看護師、管理者より病状説明があり、看取りの同意書を取っている。事業所での看取りの経験があり、家族の休憩室が用意され、希望すれば宿泊することもできる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時のマニュアルを作成し、定期的な勉強会にて対応方法の意識付けを図っている。 また、AEDの実技勉強会にも参加している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎日の防災点検や、年2回(日中・夜間帯)を想定した防災訓練を行っている。その際に、地域の方の参加も促している。(運営推進会議等で)	年に2回、6月と12月共に消防署の協力を得て総合訓練を実施している。スプリンクラーと火災通報連動装置、消火器が設置され、水や食料など備蓄がある。また、停電時の自家発電装置も設備している。地域への防災訓練の協力の案内はしているが、参加までは至っていない。	有事の際は、人的支援が必要になる為、消防団や地域との協力体制の在り方など検討する機会を持つことが望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日々の声掛けや対応に配慮している。 排泄・入浴・着替えの際には、羞恥心への配慮を心掛けている。	利用者を常に尊重し、呼称は「さん」づけて声掛けすることを心掛けている。排泄介助は利用者の居室のトイレを使用し、利用者に関する書類は事務所に保管しており、プライバシーを損ねない支援がなされている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉掛けには注意し、時にはジェスチャーを用いたり、イエス・ノーで答えられる質問を試みたりする事で、本人の意思を引き出す言葉掛けを大事にしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れはあるが、本人の希望や体調を優先し、臨機応変に対応できるようにしている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節感の確認を含め、家族の協力のもと衣替えの時期を設けている。 又、外出行事を増やす事で、いつもと違う装いでいる特別感を感じてもらえる様に努めています。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の片づけ、台拭きなど、日によって変わりはするものの、一緒になって行うことを大事にしている。	朝食は事業所フロアで料理し、昼食と夕食は2階厨房で準備される。各フロアで炊飯と盛り付けを行っている。陶器の食器を使用し、自宅で使い慣れた茶わんや箸、コップを使用する利用者もいる。誕生会の食事は事業所で調理しており、ケーキ作りでは利用者と一緒にデコレーションしたり、誕生者の好きな食べ物を提供するなど楽しみのある食事となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食の細かい方に対しては、嗜好物を準備したり、医師から栄養剤を処方してもらっている。また、同じ建物の栄養課に相談しながら、バランスの良い食事を提供するよう心掛けている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアの声掛けを行っている。自分では困難な方に対しては、ガーゼを使用し口腔内の清潔を保っていただくように支援している。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを把握し、トイレでの排泄が継続できるように支援している。できない場合は、何故できないのかを、職員間で話し合い、可能な限りトイレで排泄ができるように日々考えている。	職員は、利用者一人ひとりの排泄間隔をチェック表にて把握しており、トイレでの排泄を大切にしている。日中はリハビリパンツとパットを使用し、トイレ誘導を行って、排泄の自立に向けた支援に取り組んでいる。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	医師に相談しながら下剤の調整を行ったり、バランスの良い食事・睡眠・適度な運動を心がけている。日々工夫を重ねながら、下剤を減らせるように取り組んでいる。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日午後から入浴できる体制である。(リスト有 3~4名程度) (やもえない場合)の午前中の中の入浴実施も検討していく。	週3回の入浴を基本としており、毎日入浴の希望があれば、対応している。入浴を拒まれる場合は時間をずらしたり、翌日に変更するなど工夫をしている。入浴剤を使用し、浴室に香りを漂わせ、職員との会話を楽しみながら気持ち良く入浴できるように支援している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	心身の状態観察を行い、状況に応じて休息をすすめたり、清潔な寝具で安眠できるように支援している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別ファイルに内服薬の説明書をファイリングし、いつでも確認できるようにしている。又内服に関しては、誤薬の危険性を考慮し、内服前に職員による(二重チェック)を行い服薬実施。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々のレクリエーションやカラオケ大会、おやつ作りなど、行事を通して気分転換や、行事ごとの役割など、張りのある生活ができるよう気掛けている。		
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	公用車で買い物ツアーに出かけたり、家族の協力を得ながら、馴染みの理髪店に行ったりとしている。 地域の協力体制に関しては、今後の課題である。	季節の花見や木工祭りに出かけ、夏祭りには家族の協力を得て一緒に参加し、花火大会にも出かけている。また、家族と外食に出かける等、個々の希望に沿って出かけられるように支援している。天気の良い日は、午後より散歩の時間をとっているが、十分に実行できていない状況が見られる。	外気にふれ気分転換することは、五感への刺激にもなるため、短時間でも本人の希望に沿った外出や、ベランダでの日光浴等が出来るよう検討することを期待したい。
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理の方法については認知の兼ね合いもあり、紛失してしまう可能性が高く、本人管理は難しく、預かり対応。保管に関しては金庫で保管し出納帳に記載し、定期的に家族に報告をしている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望に沿って家族に電話したり、家族からの電話を取り次いだりしている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節ごとに装飾を変えたり、空調が職員目線での設定にならないよう留意している。 定期的な換気も実施している。	広々としたリビング兼食堂は適度な明るさと清潔感がある。台所からは料理の匂いや盛り付ける様子がわり、家庭的な雰囲気になっている。地域伝統のひな祭りの飾りがあり、季節に応じて利用者と一緒手作りした物も飾っている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食卓やソファ、お好きな場所で気の合う仲間との会話や歌など、楽しまれている。 また、一人で読書されたりと、自分の時間を有意義に過ごしていただけるよう配慮している。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に利用者・家族と相談しながら、個々に応じた居室に配慮している。 馴染みの物の使用や、使い慣れた者の持ち込みも歓迎しているが、不安にならないよう個別に対応している。	広々とした居室は、靴入れ、洗面台、トイレがあり、ベッドやダンス、テーブル、椅子を設置している。3階は畳とフローリングが一緒の部屋で4階はフローリングの居室である。利用者が生活しやすく落ち着くように、鏡台、テレビ、仏壇などを持ち込み、壁面に本人の明るい笑顔の写真飾っている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々の能力の把握に努めている。 手すりや段差のないフロアなど、リスクを回避できるような環境づくりを心掛けている。		